

令和 5 年 6 月 4 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00501

研究課題名(和文) 現代ドイツ語圏文学における紀行エッセイの美学的射程

研究課題名(英文) Aesthetic Perspectives of Travel-Essays in German Speaking Literature

研究代表者

シュレンドルフ レオポルト (Schloendorff, Leopold)

東京都立大学・人文科学研究科・准教授

研究者番号：20773188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では20/21世紀のドイツ語圏旅行文学における4つの重要な側面を明らかにした。(1)ユーゴ内戦地帯を旅したハントケのように、独自の書法によって、メディアの定型に対して対立的な知を生み出している。(2)ホッペの架空のUSA旅行記のように、ジャンル(旅行記、エッセイ、ルポルタージュなど)の境界を越えたり、事実報告と(オート)フィクションの伝統的な区別を疑う傾向がある。(3)マスメディアやニューメディアを発表の場として利用する一方で、強烈なメディア批判を展開している。(4)ロビンソナーデを更新したザイラーのように、ポストコロニアル的観点から西欧の旅行と探検の歴史に反省的に言及している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ハントケのユーゴ紛争に対する親セルビアの姿勢について政治的観点からの議論はされてきたものの、テキストの文学研究的な分析はまだ足りていなかった。彼のユーゴ紀行が現地調査を積み重ねた上で、テーマに迂回的な接近をする文学的な試みであることを明らかにした本研究は研究史の穴を埋めるのに貢献した。ヴァーチャルな交流が可能になったものの、人間的な交流と現地での調査が蔑ろにされたポストコロナ時代において、デジタル時代において情報の信頼性をどう担保するかは喫緊の社会的課題である。ソーシャルメディアや既存のマスメディアにおける意見の画一化を前に自由に出版できる作家がメディアの外側に立つことの重要性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Our project has identified four key aspects in travel literature of the 20th and 21st century: (1) The traveler challenges unquestioned certainties and produces oppositional knowledge (e.g. Peter Handke's journeys into the civil war zone of former Yugoslavia). (2) Contemporary texts tend to cross the borders of genre (travelogue, essay, reportage, etc.) or question the traditional distinction between factual report and (auto)fiction (e.g. Felicitas Hoppe's fictitious journey to America, ironically titled as "Prawda"/truth). (3) Writers use mass media and new media to publish their travel stories, oftentimes combined with strong media criticism (e.g. Peter Handke first published his critical stance on western war coverage in the daily newspapers Sueddeutsche Zeitung and Liberation). (4) Within the postcolonial discourse authors refer to the highly problematic history of travel and exploration (e.g. J.M. Coetzee's "Foe" and Lutz Seiler's "Kruso" in relation to the genre of Robinsonade).

研究分野：ドイツ文学

キーワード：紀行文学 オートフィクション ハントケ ホッペ クラハト ザイラー ポストコロニアリズム ユーゴ紛争

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、ハントケを研究する中で「叙事的歩み」(Handke 2015)というキーワードに遭遇した。そして小品『もう一度トゥキユディデスのために』(Handke 1990-97)において叙事的書法が「美学的コンセプト」として提示されていることに注目した。ディテールや(ちょっと見には)些細なことに目を向け正確に見ること、そしてノーベル賞選考委員会の選考理由(2019)にもある通り、テーマや場所に直接足を踏み入れるのではなく、その周囲を歩き巡ることが、作家の独自の方法として浮かび上がった。

政治的コンテクストで論じられることの多いハントケのユーゴスラビア=テキスト(『冬の旅』『回り道証言報告』)は、何よりも紀行文であって、真実に迫ろうとする鎮めがたい努力の賜物である。彼の紀行文を戦後から現代に至るドイツ語紀行文学(ブリンクマン、クラハト、ホッペ、グラヴィニッチ、ゼッツ)のコンテクストの中におくことで、新しい紀行文の可能性を問う本研究の方向性が見えてきた。

2. 研究の目的

現代ドイツ文学と同時代の文学的紀行エッセイにおける紀行の機能を考え、アクチュアルなエッセイや小説をケーススタディすることで、紀行モチーフが内包するものを明らかにすることを研究目的とした。その際、世紀転換期や戦後のテキストと比較しながら、現代の旅行テキストの特性を浮かび上がらせることを目指した。その際、(1)旅行と認識、(2)旅行記述の美学、(3)旅行と(新しい)メディア、(4)(ポスト)コロニアリズム、エキゾチズム、ジェンダーとアイデンティティの4点に焦点を合わせることにした。

2.1. 旅行と認識

紀行小説の伝統的な型は、出発、境界越え、認識(=目的)、帰郷というパターンをとる。この図式に対して現代のテキストがどのように振る舞うか、が問われた。フンボルトの紀行が思考をどう変容させたかを論じた Oliver Lubrich (2022)のやり方を踏襲して、現代のテキストにおいてどのような思考の変容現象が見られるか、を検討した。旅行の各段階を解明し、それぞれの段階が認識過程にとっていかなる価値を持つかを査定するのを課題とした。その際、作家によって生み出された知とメディアや政治のディスクールによる知との関係についても調査する必要があった。

2.2. 旅行記述の美学

伝統的な旅行小説は直線的/目的論的に目的地に向かっていくように作られている。旅行小説は簡単に読み飛ばせる大量生産品に過ぎなかったのに対して、現代の文学的・エッセイ的な試みはどのような違いがあるだろうか、という問いの解明が目指された。さらに、旅行小説は、自伝的小説や(政治的)ルポルタージュなどの近隣ジャンルと緊張関係にある。これについてもグラヴィニッチやホッペのテキストを手掛かりにして、現代の旅行テキストの独自性を解明することとした。

旅行記や旅行小説と隣接ジャンル 悪漢小説(ティル・オイレンシュピーゲル物)、ロビンソンナーデ(ダニエル・デュフォー)、漂泊(ヴォルテール『カンディード』)、奇想天外な架空の旅(ジュール・ヴェルヌ『地底旅行』『月世界旅行』)との対比。J.M. クッツェー、ルッツ・ザイラー、クレメンス・J・ゼッツらのテキストを手掛かりに、それらが現代文学に対して持つ意義を検討した。

様々なジャンルで、過去二三十年の間に、ジャンルの境界の揺らぎと美的コンセプトの根

本的な変更(非直線的な小説、不条理劇/実験劇、オートフィクションなど)がなされた。特にクラハトを手掛かりに、この変化が現代の紀行文学に見られるかどうかを検討した。

旅行記、紀行小説はゲーテの『イタリア紀行』『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』やノヴァーリスの『青い花』など長い歴史を持つ。現代の作家がこの伝統に対してどのようなスタンスを取ったか、主としてプリנקマンのテキストを元に考察した。

2.3. 旅行と(新しい)メディア

文学的な旅行テキストと旅行エッセイはマスメディアとソーシャルネットワークにおける旅行の扱い方に対して緊張関係にある。作家はこれらメディアに対してどのように振る舞っているだろうか。特にハントケを手掛かりにして考えることとした。発表形式(書籍、日刊紙、デジタルメディア)が旅行テキストにどのような影響を与えているか、についてケルマーニを例に考えることとした。旅行はそれ自体がガイドブックや地図などメディアを利用している。それらが文学的な旅行テキストにおいてどのような役割を果たしているかについて、ハントケとエンツェンスベルガーを例に検討することとした。

2.4. (ポスト)コロニアリズム、エキゾチズム、ジェンダーとアイデンティティ

植民地主義の遺産やポストコロニアリズムが現代旅行文学とどのような関係にあるか、を解明することを目的として、旅行者のヨーロッパ中心主義的な眼差しに対する(自己)批判に注意を向けた。長らく旅する作家たちは、官吏、兵隊、宣教師、教員、学者らと同様に、「植民地支配者」とみなされていた(Loomba 2005)。その際、旅行は、空間を構成し、場所を我がものとするにつながる。こうした文脈で、旅行と征服との関係を考えた。「旅行の終わり」(Lévi-Strauss 1955)の後の旅行の諸相を考えることとした。

3. 研究の方法

旅行の実践を宗教・布教史、戦争・植民史、交通・技術史、ジェンダー理論と身体論、空間論とグローバル化などのディスコースで編まれたものとして考える立場に立った。その際、フォーコーの歴史的ディスコース分析、特に「空間の時代」(Foucault 1967)における旅という概念を援用した研究方法をとった。そしてスペーシャル・ターンの観点から、旅行を空間構成の実践として捉えることとした。さらに、旅行記は真正性を担保するために、様々なレトリックを用い、ナラティブな戦略を取る。本研究ではその分析に重点を置いた。

研究代表者と研究分担者によって選び出されたテキストは、研究目的に記したように、主として次の四つの観点から分析された。(1)旅行と認識、(2)旅行記述の美学、(3)旅行と(新しい)メディア、(4)(ポスト)コロニアリズム、エキゾチズム、ジェンダーとアイデンティティ。

当初重視していた国際的な交流は、コロナ危機によって実現が難しかった。制約の厳しいなか、それでもオーストリアとドイツのアーカイブや図書館に何度か研究出張をして、資料を収集するとともに、ウィーン大学とハンブルク大学の専門家たちと意見交換する機会を得た。日本とドイツでシンポジウムを開催し、2022年には早稲田大学で研究の最終成果を発表する研究集会を開催した。

4. 研究成果

4.1. 旅行と認識

ハントケはそのユーゴエッセイで、政治的ディスコースにおける反対派のポジションをとったばかりではない。同時に深いメディア批判と紀行エッセイの革新をやり遂げた。そして、旅行記の伝統的な型に依りながら、同時に、それを崩し、拡大した(直線性の克服)。

問いかけ疑う作家(『泣きながら問いかける』)は、査定し有罪判決を下すマスコミの戦争レポーターに対抗するモデルとして提示されている。彼にあっては、旅行小説と旅行記の境界は流動的なものとなる。旅する者の認識は、メディアの支配的な見解に対抗するものとなっている。旅行は段階的ではあるが、決して直線的な認識プロセスではなく、迂回しながら手探りして近づいていく思考の運動となっている。ハントケの物語エッセイ『キノコ狂をめぐる試論』(2013)などでは、外的な認識というよりも、旅する者の内的な「変化」が中心に置かれていることが明らかにされた。

4.2. 旅行記述の美学

グラヴィニッチ、ホッペ、クラハト、ブリンクマンらの作家たちは同時代のメディアになお見られる読み飛ばせる多量生産の旅行記に対抗するような旅行文学を構想している。その際、旅行記に(オート)フィクションの要素が混ぜ込まれる。聖地 Medjugorje (ボスニア＝ヘルツェゴビナ) に向かうグラヴィニッチの旅は、あるマフィアのオルガニズム体験で終わるし(Glavinic 2011)、ホッペのアメリカ旅行はルポルタージュと奇想天外な逸話との混交となっている(Hoppe 2018)。ゼッツは伝統的な素材(オイレンシュピーゲル)やジャンル(悪漢小説)を風刺的社会批判的に加工したし(Setz 2015)、ザイラーもロビンソナーデモチーフを取り込んだ(Seiler 2014)。いずれにあっても事実性と虚構性が意識的に混ぜられ、両者の間の二分法的な境界線が揺るがされていることが明らかになった。さらにクラハトの一連の旅行文学にあっては、旅行記、紀行小説、フォトリポルタージュなど様々なテキストタイプの混交が認められた(Kracht/Nickel 1998; Kracht 2000; Kracht 2006; Kracht/Nickel 2009)。

作家たちは直接的であれ間接的であれ文学史的な伝統を参照している。ただし、その目的は伝統的な書き方に逆らって新しい構想を実現するためである。ブリンクマンはゲーテのローマ紀行を下敷きにして換骨奪胎し、多種類のテキストタイプのコラージュを作り上げた(Brinkmann 1979)。彼が現代旅行文学の先駆けであることが再確認された。

4.3 旅行と(新しい)メディア

現代作家たちは部分的にはマスメディアと新しいメディアを使うが、それを必ずメディア批判と絡めている点に現代紀行文学の特徴がある。例えば、ハントケは、ユーゴエッセイを最初に日刊紙で発表した。しかし同時に戦争におけるメディアの役割を厳しく批判した。ケルマーニも東ヨーロッパ旅行日誌をまずシュピーゲル誌に発表し、ディスカッションフォーラムに出た意見をフィードバックとして受けて、読者との双方向的関係を築いてから書籍として発表した(Kermani 2022)。

地図というメディアに対する批判にも注目した。例えばハントケによれば、マッピング(地図制作)という実践は権力装置と、地図はイデオロギー的の含意を持つ政治的装置と見ることができる(Handke 2009)。さらに旅行ガイドツーリズムに対する批判的な取り組みや、ブルジョワツーリズム批判のエリート主義への批判も見られることに留意した(「ツーリストは、見つけるところによって探していたものを破壊する」(Enzensberger 1958))。

4.4. (ポスト)コロニアリズム、エキゾチズム、ジェンダーとアイデンティティ

現代作家たちは(ポスト)コロニアリズム論の中に自らを位置づけている(例えば、Seiler 2014)。旅する女性は19世紀以来、「女性の解放」のメタファーだったが、ホッペなど、そうした解放言説とは違ったポジションを取る女性作家が最近では出現していることが明らかになった。

4.5. ワークショップ

2021年9月25日のワークショップ(東京ゲーテインスティトゥート、東京都立大学主催)にて、作家ゼッツを招いて、旅行記の隣接ジャンルとしての悪漢小説のアクチュアリティについて討論することができた。Vortrag: *Mimetische Gewalt in Clemens J. Setz' „Till Eulenspiegel“-Adaption*. Online-Workshop mit Clemens J. Setz, Tokyo Metropolitan Universität, Goethe Institut Tokyo, am 25. September 2021.

本研究の総仕上げとして2022年12月には、東京都立大学、早稲田大学、中央大学、Fudan大学、フンボルト大学、ボーフム大学、慶應大学の参加者を集めて、研究代表者と研究分担者の学術的成果について討議することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Hiroshi Yamamoto	4. 巻 0
2. 論文標題 "mitten im japonisierenden Wandbehang ". Zum Japanbild in Marion Poschmanns Lyrikband "Geliehene Landschaften "	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Muroi, Yoshiyuki (Hrsg.) Einheit in der Vielfalt? Muenchen 2020	6. 最初と最後の頁 542 - 549
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Hiroshi Yamamoto	4. 巻 8.2
2. 論文標題 "Meine Sozialisation ist das Lager. " Zu den "Russlandgedichten " der deportierten Dichter Oskar Pastior und Yoshiro Ishihara	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Matthias Fechner and Henrieke Stahl (Hg.): Subjekt und Liminalitaet in der Gegenwartsliteratur. Berlin 2020	6. 最初と最後の頁 405 - 430
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Leopold Schloendorff	4. 巻 519-14
2. 論文標題 "Vorgaukelungen aus der Maimorgenluft". Handkes "Nachschriften" auf Jugoslawien und den Krieg im Spannungsfeld von Fiktionalitaet und Faktizitaet.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Jimbun-Gakuho	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Leopold Schloendorff	4. 巻 39
2. 論文標題 "Der Vorfahr ist von der Bank aufgestanden und hat mich allein da hocken lassen. " Handkes erzaehlerisches Drama Immer noch Sturm als Buehne familienbiografischer Identitaetsfindung.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Oostoria bungaku, Zeitschrift der Japanisch-oesterreichischen Literaturgesellschaft	6. 最初と最後の頁 12-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Leopold Schloendorff	4. 巻 1
2. 論文標題 "Ottolie muesse entfernt werden". Mimetisches Begehren und Gewalt in Goethes Wahlverwandtschaften.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Waseda-Blaetter 29	6. 最初と最後の頁 64-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Leopold Schloendorff	4. 巻 1
2. 論文標題 "Der Rhythmus der Steinigung". Rene Girards mimetische Theorie in Geschichte, Mythos und Literatur.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Jimbun-Gakuho 518-14	6. 最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Leopold Schloendorff	4. 巻 1
2. 論文標題 Handkes Japan oder das Lob des Daemmerlichts	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Austrian Studies: Literaturen und Kulturen. Eine Einfuehrung.	6. 最初と最後の頁 157-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Leopold Schloendorff	4. 巻 1
2. 論文標題 Was ist der Reim auf Schwelle? Überlegungen zu Peter Handkes Schwellenkunde in Der Chinese des Schmerzes.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz	6. 最初と最後の頁 227-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Leopold Schloendorff	4. 巻 517-14
2. 論文標題 "Auf der Suche nach einem Zuhörer". Zur Triangularität des Begehrens in Peter Handkes Don Juan-Erzählung	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Jinbun-Gakuho	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Leopold Schloendorff	4. 巻 1
2. 論文標題 Vorwort: Welt/Literatur-Formationen und Funktionen der Literatur in Prozessen der Globalisierung	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Zesuren; Welt/Literatur	6. 最初と最後の頁 10-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Leopold Schloendorff	4. 巻 516-14
2. 論文標題 Der Till Eulenspiegel des Clemens J. Setz. Oder das Ende der mimetischen Gewalt im Suendenbockritual	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Jinbun-Gakuho	6. 最初と最後の頁 53-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Leopold Schloendorff
2. 発表標題 Mimetische Gewalt in Clemens J. Setz ' Till Eulenspiegel-Adaption.
3. 学会等名 Online-Workshop Literatur des Posthumanismus mit Clemens J. Setz (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Leopold Schloendorff
2. 発表標題 Das Fremde im Eigenen. Die Grenzgaenge des Peter Handke. Eine Schwellengeschichte
3. 学会等名 Asiatischen Germanistentagung (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Leopold Schloendorff
2. 発表標題 Ueber Narren und Freiheit. Clemens J. Setz erzahlt Till Eulenspiegel.
3. 学会等名 Literatur des Posthumanismus (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Leopold Schloendorff
2. 発表標題 Handkes Jugoslawien-Durchquerungen: Umwege und Ausschweifungen auf der Suche nach Wahrheit
3. 学会等名 Workshop Reise und Literatur (招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Teiko Nakamaru, Leopold Schloendorff, Stefan Buchenberger, Sho Saito	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Iudicium	5. 総ページ数 274
3. 書名 Zaesuren; Welt/Literatur.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	山本 浩司 (Yamamoto Hiroshi) (80267442)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	ボーフム大学			
オーストリア	ウィーン大学			